

オリエンテーション・ 導入：近代キリスト教と政治思想

1. 無教会キリスト教の諸問題

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1-1：問題と方法 | 1-2：海老名弾正と植村正久 |
| 1-3：無教会キリスト教とその意義 | 1-4：内村鑑三の日本的キリスト教 |
| 1-5：内村鑑三の非戦論 | 1-6：矢内原忠雄の科学技術論 |

2. 波多野宗教哲学の射程

2-1：弁証神学から宗教学・宗教哲学へ	6/9
2-2：波多野宗教哲学の挑戦	6/16
2-3：波多野宗教哲学の射程	6/30
2-4：他者論——波多野とレヴィナス	7/7
2-5：象徴論——波多野とティリッヒ	7/14
2-6：日本キリスト教思想研究の課題と可能性	7/21
Exkurs 1：戦後70年の教会と神学——組織神学の場合	6/23
Exkurs 2：ハイデッガーとキリスト教	7/28
フィードバック	

<前回>内村鑑三の非戦論

(1) はじめに

1. キリスト教の多様性がそれぞれの国家・地域とナショナリズムの関連において解釈できるとの仮説に従って、キリスト教と国家・民族との関連へと考察を進めてみたい。

そのために取りあげられるのが、内村鑑三による非戦論に関わる一連の論考。内村鑑三研究の蓄積、⁽³⁾ その中でも戦争と平和をめぐる問題あるいは非戦論は、中心的な研究テーマとなっている

(2) 東アジアとキリスト教

2. 儒教文化圏や漢字文化圏→広域的な文化的共通性。東アジアの宗教状況とも無関係ではない。古代から政治や文化はもちろん、宗教に関しても広範な相互交流が存在。近代のキリスト教伝播以前の段階ですでに、東アジアには、「基層宗教/民族宗教/世界宗教」と図式化できるような共通の重層構造が存在し、また、宗教的制度としての「家」が重要な位置を占めていた。⁽⁵⁾ しかし、19世紀中頃以降、西欧列強の進出とそれに促された近代化という歴史的状況の中で、キリスト教（とくにプロテスタント諸教派）が伝播されることによって、東アジアの宗教文化状況は急速に流動化することになる。

3. 「東アジアの宗教動向」⁽⁶⁾ を概観する。現在の東アジアのキリスト教の多様なあり方は、決して自明なものではなく、それ自体が解明を要する問いである。

仮説：これらの現状の相違がそれぞれの地域におけるキリスト教とナショナリズムとの関連性に相関している。

(3) 内村鑑三の非戦論とその展開

5. 内村鑑三は同時代のナショナリズムとしばしば軋轢を起こしながら（不敬事件（1891年1月9日）、近代日本の戦争政策を批判しつつ、キリスト者として信仰を貫いた人物。内村という人物はナショナリズムとの単なる対立においてのみ捉えることはできない。

内村の有名な「二つのJ」（Jesus と Japan への愛）という言葉が示しているように——「わたしは二つのJを愛する、その他を愛さない。一つはイエス（Jesus）、一つは日本（Japan）である」（『世界のなかの日本』（内村鑑三選集4、306頁）——、内村は、キリスト者でありつつも、生涯日本を愛することをやめなかった人物なのである。その点で、彼は一貫して愛国者であったと言わざるを得ない。

8. 内村鑑三の戦争論の展開：義戦論から非戦論への移行の三つのステップ。

(1) まず内村の戦争論の出発点、日清戦争（明治 27-28/1894-95 年）に関する義戦論。

「日清戦争の義（訳文）」（明治 27.9.3.『国民之友』234 号）。「日本は東洋に於ける進歩主義の戦士なり」（18）という立場から、「吾人は朝鮮戦争を以て義戦なりと論定せり、其然るは戦争局を結て後に最も明白なるべし」（19）と、日清戦争の正義性を内外に向かって主張し、「日清戦争の目的如何」（明治 27.10.3.『国民之友』237 号）においては、次の三つの項目について、日清戦争の義を説明している。

「一、朝鮮の独立を確定するにあり、」「二、支那を懲誡し之をして再び頭を擡げ得ざらしむるにあり、」「三、文化を東洋に施き、永く其平和を計るにあり、」（20）

・日清戦争が義戦であると言っても、それは侵略戦争を正当化しようとの意図ではない。内村が義と認める日清戦争は「亜細亜の救主」として「支那其物と戦ふにあらずして」（24）、北京政府との戦争であり、「要は支那を覚醒する」（27）ことにある。——その前提の一つは、北京政府と中国との区別——。

・内村の「日清戦争＝義戦論」という認識自体は、当時、キリスト教界を含め広く共有されていた。⁽⁹⁾ それは、「富国強兵＝近代化＝進歩＝善」という日本の近代化イデオロギーの典型である。なお、内村の場合、義戦論の背後には、歴史学的地政学的な議論が存在する点に注目すべき。⁽¹⁰⁾

(2) 義戦論は、日清戦争後に全面的な転換。「猛省（英文）」（明治 30.12.14-16.『万朝報』）。

「下関条約は平和の条約ではなかった」、「あれは義戦として始まったが、欲戦として終わったのだ」（33）。内村は、明治政府の近代化政策自体と批判的に対峙することになる。内村自身は、この猛省にしたがって、「誤っていたことを悔い改め、われわれが高貴であることを止めた所から始める」（36）、つまり、キリスト教思想の根本に帰って、戦争論の再考を試みるのである。

(3) 「戦争廃止論」（明治 36.6.30.『万朝報』）。内村は明治政府の戦争政策への反対の立場を明確に表明する。

9. なぜ義戦論から非戦論への転換がなされたのか。

キリスト教平和思想あるいは聖書研究、平和主義一般、そして歴史的事実と内村の実験という三つの観点。その中でも、まず非戦論への移行を促した要因として注目すべきは、キリスト教平和思想、特に聖書研究である。

10. 「平和の福音（絶対的非戦主義）」（明治 36.9.17.『聖書之研究』44 号）に、「聖書の、殊に新約聖書の、此事に関して私共に命ずる所は唯一つであります、即ち絶対的の平和であります」（59）と述べられる。

13. 内村の非戦論は、聖書研究に基づくキリスト教的論拠と一般的な論拠とを組み合わせることによって展開されている。

14. 奇異なる事態：本来平和主義であるはずのキリスト教が現実には主戦論を唱え、非キリスト教者が非戦論者となるという逆転。

・キリスト教とは何か、キリスト教徒とは誰か、という問いが浮上せざるを得ない。「真のキリスト教＝現実のキリスト教会」という等式が単純にまた完全に成立しない歴史的事態について、キリスト教はどう考えどう答えるべきか。

15. 日露戦争に先立つ「平和の福音（絶対的非戦主義）」（明治 36.9.17.『聖書之研究』44 号）。「聖書に照らして見て英国も米国も露国も仏国も基督教国ではありません」（63）と述べており、これは無教会主義の論理とも無関係ではない。

17. 論点の追加。

・内村の非戦論は日清戦争から日露戦争後に至る歴史的状况の中で精密化し、同時に問題を内包することになる。たとえば非戦論者のなすべき事柄を、「戦争前／戦争中／戦争後」

の状況の推移の中で論じるという問題である。つまり、非戦論は個々の歴史的状況を超えたキリスト教のメッセージに連なりつつも、歴史のそのときどきの「今」（＝カイロス）における適切性を問われるのである

・内村の非戦論は平和主義者としての実践の内実という観点から問われるべきであり、20世紀のほかの平和主義との比較研究によって、その評価を行うことが必要。⁽¹²⁾

・弱者の視点・庶民の視点。日清日露戦争が庶民や弱者にいかなる悲惨さをもたらしたかについて、内村が共感的な眼差しを有していることを示している。もちろん、内村が武士的な立場を完全に脱却したとすることは早計であるが、しかし、内村が別の視点を獲得しつつあったことに十分留意すべきであろう。

「寡婦の除夜」（明治29.12.25。『福音新報』78号）あるいは「寡婦の声」（明治38.1.20。）

（4）自己超越的ナショナリズムと愛国のメタファー化

19. 「国あるいは民族を愛する」という場合の「愛」の意味内容。内村に関してナショナリズムという言い方が妥当するかについては問題が残るが、ここでは、ナショナリズムを民族主義をも包括し得るものとして広義に解しておきたい。⁽¹⁵⁾

20. まず「二つのJ」から。ポイントは、「イエス」（キリスト教）と「日本」の関係。

・「日本」：生に意味と力を与え、その具体的内実を支えてきた象徴体系の源泉としての実体原理。

・「イエス」：批判原理。「日本」が進むべき道を誤ったならば、キリスト者は、「イエス」「神」という視点から現実の日本のあり方を批判する義務を負っている。

・「民族」「ナショナリズム」という概念の中に、現実の逸脱した批判されるべきナショナリズムと本来の目ざすべきナショナリズムという二重性が生じる。

21. 明治以来の日本の近代化がめざしてきた「強国」（経済的・政治的・軍事的）に対して、内村が理想とした国家とは経済大国や軍事大国ではなく、農業を中心とした非軍事的な小国（「デンマーク国の話」1911年）。→ 愛国の意味内容の転換

23. 内村の愛国主義＝民族において民族を超えるナショナリズム、つまり自己超越的ナショナリズムとも言うべきもの＝戦争論の展開において生じた「愛国」のメタファー化。

（6）むすび

27. 「民族」——「国家」は当然として——は単なる自然的な所与ではなく構想力の産物である。⁽²²⁾ その点で民族は常に新たに形成されるべき歴史的課題なのであって、この点から、自己超越的ナショナリズムは、既存の民族理念・民族意識の転換と新たな形成の鍵となりうる。つまり、「民族」の自己超越と連動する形で「愛国」の意味を転換し、それによって、自民族中心主義を超えるもう一つのナショナリズムを構築するという可能性。

28. 同様のことは、他の宗教においてもその可能性が問われうるはずである。そうであるならば、自己超越的ナショナリズムは、宗教的多元性の状況下にある、すべての諸宗教の共通課題ということになる。ここに、宗教間対話の意義の一端を認めることができる。

異なる宗教的信念に立つ多様な宗教者が、東アジアの宗教的多元性という文脈において国家・民族と宗教の関係性を問い直す共通課題に取り組むとき、その共同作業は、宗教的多元性に基づく宗教間対話の営みを通じた「公共性」の生成の場となる。

29. 自己超越的ナショナリズムあるいは愛国のメタファー化という議論は、実に「私（個人）／親密圏（家族など）／公共／市民社会／公」といった諸階層をいわば下から貫く公共性の生成の動きを指し示している。ここに、西欧の政教分離システムが東アジアに移入される際に陥りがちな「私」と「公」の抽象的な二分法を超えて、より実態に即した宗教と公共社会の理論的關係づけを行うことが可能性になる。⁽²³⁾

1 — 6 : 矢内原忠雄の科学技術論

(0) 近代という時代

・いつの時代にも、しかし近代特有の。

・無教会の近代論：

・矢内原忠雄『無教会主義キリスト教論』（キリスト者の信仰II）岩波書店、1982年。

・「信仰と理性」（1947）

「信仰は理性を否定しないが、理性を超えた領域をもつて居る。理性は信仰を否定しないが、信仰以外の領域をもつて居る。両者は二つの環のやうに連つて居る。」（15）

楢田のイメージ：内村から

「楢田形の話」（1929、全集 32）：「真理は円形に非ず楢田形である。一個の中心の周囲に画かれるべき者に非ずして二個の中心の周囲に画かれるべき者である。」（207）

「宗教に於ても同じである。宗教も円形に非ずして楢田形である。其中心は一個に非ずして二個である。・・・宗教は神と人とである。」（208）

「其実際の方面に於て宗教は慈愛と審判である、愛と義である。」（209）

・「復活論」（1947）

「死んだ肉体を再び起すのでなく、新しき霊の体を賜ることが復活であるとすれば、之らの子供らしき愚問は一掃せられる。「甦る」ものは人間であつて、肉体ではない。肉体は朽ちてしまふのである。」（33）

「屍体を土葬にしたる場合は如何、火葬、水葬の場合は如何、猛獣若しくは食人種に食はれたる時如何等、アウグスティヌスが挙げて居るような復活の仕方についての難問奇問」

「復活の希望があればこそ、我らは此世の苦勞を怖れず、誤解を気かけず、確かな心を以て信仰生活を歩んで往くことが出来る。而してこの日常生活に堅実な歩みを与へることこそ、復活の信仰を迷信と区別する實際的標準なのである。」（37）

・「宗教と政治」（1947）

「人は正しき宗教と、迷信的宗教との見わけをしなければなりません。その見分けの標準の一つとして、正しき宗教は政治を清め、国を興す力あるものたることを必要とするのであります。」（48）

・「神癒論」（1951）

「いはゆる神癒派の人々は言ふであらう、藤井や内村は医薬を用ひながら神癒を祈つたが故に、神癒は行はれなかつたのである。神癒を祈る者は医師と医薬を拒否し、専ら奇蹟的治癒だけを祈ることに徹底しなければ神癒の恩恵は受けることが出来ないと。これは一見徹底した純信仰であるやうに見えるけれども、その考の誤謬は次の三点から知られる。」（84）

「然らば福音書や使徒行伝に多く記される「徴と不思議」の事実が、今日の基督教会に殆んど行はれないのは、近代の信仰が科学的合理主義に禍ひされて、初代教会のやうに聖霊に溢れてゐないからであらうか。神癒派の人々はそのやうな見解を抱いてゐる。・・・無教会内に聖霊派とでも呼ぶべきものが起つて、神癒を説き、異言を語り、之で従来は無教会に欠けてゐたものが補はれると見てゐる向きもある。」（87）

「無教会の根本的信仰は聖書的である。・・・この啓示宗教としての基督教の根本的信仰を、合理主義精神の普及した今日において堅持することは、聖霊の助けなくして出来ることであろうか。従来無教会にあつては、たしかにはゆる神癒派的な奇蹟は行はれず、またことを尊重しない。無教会において顕はされた聖霊の「業」は、愛であり、忍耐であり、天国の希望であり、迫害に耐へる信仰の堅持である。」（88）

「まことに科学の進歩とそれに伴ふ合理的精神の普及とは、近代の特色であり、それによ

S. Ashina

つて宗教から多くの粗野な迷信が除かれた。近代合理主義の発達は、基督教の歴史にとりて決して損失ではなく、かへつて信仰の純化に寄与したものと私は信じてゐる。」(89)

「靈的と理性的と、両方の神の能力のバランスの取れた把握」「我らは聖霊による直接的神癒があり得ないと主張する者ではない。しかしそのやうな神癒が聖霊の能力を示す唯一の方法でもなく、最大の方法でもないことを主張する。」(89)

・「再臨信仰の歴史性」(1959)

「人生の幸福を求める反面において、自殺は増加している。戦後における自殺率の増加は、日本だけのことではない。外国でもそうだそうです。日本では特に青年層の自殺率が高い。自殺とまでは行かなくても、精神分裂症の多いことが目立ちます。・・・戦争が希望を破壊したからです。」(276)

(1) 矢内原の現代とわたしたちの現代

1. 近代／現代に対して。あれかこれかでも、妥協・埋没でもなく。それは何か？

・「現代の危機とキリスト教」(1954)、類似性：憲法、軍備、教育、そして原子力。

「日本の憲法を改正する必要がある否かといふ事が、今しきりに論ぜられてゐる問題です」(131)、「日本の平和憲法の条項は占領終了後の日本の実情に適合しないとして、これを修正して再軍備をし、交戦権を取り戻す必要があるか否か」(132)、「警察法の改正」(134)、「教育二法案といふものが国会で審議中であります。この二法案の趣旨とするところは、従来の義務教育、ことに日本教職員組合のやり方が行き過ぎである。あれを放任して居れば、日本の義務教育は赤化教育になってしまう。それは大変だから、今の中に教育の活動を制限するための立法措置が必要であると、いふにあります。」(135)

2. 原子力政策の原点(あるいは攻防)としての1950年代

47Newsの特集企画「原子力時代の死角 核と日本人」

(<http://www.47news.jp/hondana/nuclear/>)

・「1954年には、日本学術会議が「民主・自主・公開」の原子力3原則を採択」、「学術会議の警鐘にもかかわらず、原子力委員会はコールドホール改良型炉の建設を許可、66年に運転が始まった。そして64年には福島第1原発の建設計画が公表された。」

・1953年、アイゼンハワーの国連演説「平和のための核」。1957年、「国際原子力機関」(IAEA)の設立。アメリカ主導の原子力政策の確立。

3. 湯川秀樹(初代原子力委員、1956/1-1957/3。委員長、正力松太郎)

京都大学旧湯川研究室同窓会有志「「原発の再稼働」をめぐって各界に訴える」

(2012年4月)

cf. ヤスパース『原子爆弾と人間の未来』(1958年)

カント、シェーラー、ヤスパース、アーレント

4. 政治経済の論理による原子力政策(平和利用)の推進

↓

・危機を歴史の深層において捉えること(批判的学としての人文学)

・矢内原とティリッヒの世代に戻って問題を論じてみる。

(2) 危機の時代とキリスト教——矢内原忠雄とティリッヒ

5. 現代は核の時代、そして宇宙時代(近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的变化):「自然」の徹底的な改変(外なる自然も内なる自然も)

→「文化の神学」を経由した「自然の神学」

・ハンナ・アーレント『人間の条件』(ちくま学芸文庫、1958)

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この

物体は数週間、地球の周囲を廻った。」(アーレント、1994、9)

20世紀の科学技術は「人間の条件」を変容させる可能性をもっている。

人工衛星：宇宙空間＝「人間の条件の本体そのもの」である地球・大地から切り離された空間領域。「人間の条件から脱出したいという望み」(同書、11)。

「人間の寿命を百歳以上に伸ばしたいという希望」、そして原子力と遺伝子工学。

↓

20世紀の科学技術の意味と両義性

欲望：充足と暴走

6. 原子力の両義性 → 原発と原爆

従来の選択：危機を感じつつも平和利用論へ

7. 矢内原忠雄

1) 「原子力時代の平和」(1956)

「真の問題はそのような止むを得なかったか否かという点にあるのではなくて、原爆という破壊力の大きい兵器を使用することの罪悪性にあるのです。原子力時代の平和は、破壊力の絶大な兵器の出現によっておびやかされている」

「恐怖心から起る平和の保障というものは底の浅いものであって、戦争の起ることを恐怖心だけで抑えることは出来ないだろう」(162)

「トインビー教授の講演」「原子力という巨大な動力は、平和的な目的に用いられる時には機械的生産方法と結びつき、破壊的な用途のために用いられる時は戦争と結びついている。このように現代は戦争の時代であり、機械化の時代であり、そして原子力の時代であるが、かかる時代において人に自由を与えるものは宗教だろう」(163)

「戦争の破壊力」「生産および生活の機械化」「そういうなかで人間が息をつく場所がなくなり、人間の自由が失われる。機械化と原子力は根本的な意味においては人に自由を与えるのではなく、むしろ人の自由を圧迫するものである」(164)

・軍事利用も平和利用も人間に害を及ぼす

「科学の力をそれほど単純に、無条件に信じ込んでいる」(164)

「科学が進歩すれば、それによって無条件に人が幸福になると考えることは全くの迷信であります。幸福になる面もあるけれども、不幸になる面もあって、原子力時代になっても人は本質的に少しも幸福にならない。不安と不自由とが重くのしかかっている」「皆おびえている状態です」(165)

「原子力時代にあつて、動かない心の平和と自由を人に与えるものは、まことの宗教だけであります」(171)

トインビーの日本講演「歴史家が見た世界の情勢」(1956年)

→ 『歴史の教訓』(岩波書店、1959年)。

2) 「原子力時代の宗教——科学技術は無条件の幸福を約束しない」(1957)

「原子力の研究は時代の寵児の観を呈し、原子力という前代未聞の強力な動力源の発明により人類の幸福と繁栄にすばらしい前途が開かれるという予想」「原子力神社でも建りそうな勢い」、「原子力神社はまだ末社の方で、その背後には科学技術神社という総本社がある」(173)

「原子力を生み出した科学技術そのものが、人類の生存と福祉を無条件に保障するという思想も、また同様に一つの迷信である」(174)

「原子力時代の一つの特色は、国家権力の増大である。芸視力の研究と応用は巨大な費用を要することと、その大部分が国防上の必要という名の下に行われるということは、この研究並びに応用に対する国家の管理統制を強化する。原子力の秘密を国防上の理由から国家が保持することは、学問研究の自由の要求と衝突する」、「民主主義国も共産主義国も

S. Ashina

区別がない」「個人の自由を犠牲として国家という祭壇の前にささげさせようという要求である」(175)

3) 「原子力時代の宗教」(1957)

「原子力時代に住んでいる人間は、ますます人間らしさを失って、人間味が乏しくなってくる」「寿命も長くなってきましたけれども、それで果して人生が楽しくなるかという、必ずしもそうではないらしい」(179)

「学生諸君も簡単に自殺します。これも一種のノイローゼ症状でありましょう」、「ちょっと希望を失ったというだけで虚無感にとらわれ、簡単に死を選ぶという傾向」、「それからもっと大きな問題として、戦争と原水爆で非常な不安と恐怖を人類が抱いている」(180)

「日本でも道德教育の必要がいわれますけれども、道德教育が一番必要なのは政治家でありまして、生徒ではない。そこで政治をよくするためには、教育が必要だということになる」、「原子力時代において人間に自由を与えるものは宗教」(182)

「宗教に帰るといふ時代の要求はあるが、しかし昔から伝わったままの形の宗教には帰れない。伝統的な宗教の中から現代にふさわしくない要素を取り除いて、現代人のたましいをつかむところの宗教にしなければならない」(184)

「人間の体の病気をいやすことを主眼にするものは真の宗教ではない」(184)

「宗教は知識を排除するものであってはいけない」「今日は科学も真の宗教を尊重するし、宗教も科学を尊重するようになってきています」「信仰は知識を刺戟した」(185)

「他の宗教もしくは思想に対して寛容であるか否かということ」(186)

「日本の教育は今や大きな危機に臨んでいる。科学技術教育の振興、自衛隊の増強、民族教育の振興ということが唱えられているが、これらのものをつなぎ合わせてみると、そこに浮かび上がってくるものは決して望ましいところの新しい日本の姿ではない」(198)

4) 「原子力時代の教育」(1957)

「科学技術の目的は何であるか。科学技術は何のために用うべきであるか、という目的意識」(215)

「科学技術の教育は」「技術を何のために用うべきかという、目的を深く考えない欠点をとめないやすい」「科学技術は手段の研究」(216)

「結局、人間の問題」(217)

5) 「原子力時代の思想」(1957)

「原子力の平和利用によって、人類の生産力が飛躍的に進歩することが充分期待されるのであります」

「にもかかわらず反面において、原子力は人類の生産と生活に対し破壊的脅威を与えているのであります」「原子爆弾」「ミサイル」「人工衛星」(222)

「この矛盾と緊張は科学技術の面だけでなく、国際関係においても現今の世界は不安渾沌の時代であると言えます」

・ティリッヒ的には、両義性、無意味性の不安

6) 「科学と道徳」(1959)

「宇宙旅行時代」(287)

「自然科学の研究には巨額の金を出す国も、社会科学や人文科学については、なかなか大きい研究費を出しません」(291)

「経済が非常に進歩して社会における巨大な富の蓄積ができたことが、宇宙研究や実験の前提」「軍部」(292)

8. ティリッヒ『宗教の未来』

1) 「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化(objectification)したことであった。つまり、『母なる大地』から『母なる』という性格を奪ったこと、つまり彼女から、命を与え、養い、抱擁し、彼女のために育て、再び自分のところへ呼び戻す、といった性格を奪ったことである。母なる地球は、完全に計量可能なものとして、観察の対象である大きな物質の塊と化した。」(50)

2) 地球脱出の欲望の前面化が現代の文明内部に大きな不安を生み出した。近代以降の科学技術の進展による不安の増幅。

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである」(49)

原子力技術を最初に形にした核兵器において、人間は「自分の所有している支配力を、人類の一部だけでなくそのすべてを絶滅させるためにも用いることが出来るという事実」に直面することになった。「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結びあわされている限りなくなることはないであろう」(49)。

9. 科学技術の両義性の影の面を認識するとき、キリスト教思想が科学技術に対してもつべき関わり方として、科学技術の批判的監視者としての役割を挙げることが可能になる。人間存在の有限性と罪責性とに規定された科学技術の両義性は、科学技術の力が増大するに比例して、その潜在的な危険性をも増大させることになったからである。しかしこの危険性は人間にとって偶然的な事柄でなく、むしろ科学技術をその本質に組み込んだ文明の運命と言うべきものであった。したがって、科学技術、特に近代以降現代の科学技術に対して向けられるべき批判的な監視の目は、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要になる。

↓

批判と文明的視点

(3) キリスト教における科学技術論

現代キリスト教思想の根本問題：

原子力時代の科学技術に対するキリスト教・キリスト教思想の関わり

10. ティリッヒの科学技術論、あるいは神律的科学

19世紀の自由主義神学と20世紀の弁証法神学の関係という文脈。

形成(Gestaltung)と批判(Kritik)

11. 1920年代後半のプロテスタンティズム論の枠組みで

・プロテスタント原理の構造：「合理(自律)と超合理」と「批判と形成」の二つの軸

↓

・4つの契機：批判と形成、合理と超合理

合理的批判：歪曲としてイデオロギーに対する批判

合理的形成：自己同一性としてのイデオロギー(リクール)

超合理的批判：預言者的批判

超合理的形成：恩恵の形態・サクラメント・祭司

12. 合理性と超合理性との関係は、「自律—他律」と「自律—神律」の二つの在り方が可能である。神律は、自律的な合理性に弁証法的に接続された超合理性。

科学技術への対応・議論はこの4つの立場の弁証法的統合によってなされる。

↓

科学自体は自律的科学以外には存在しない。

しかし、「自己閉鎖的な科学」(自律的科学)と、目的設定・批判・根拠付けへと開か

れた科学、あるいはこれらの科学外部の契機と自覚的に関連づけられた科学（神律的科学）との相違は存在する。

13. 批判：合理的批判と預言者的批判を結びつけること（神律的科学の第一段階）

たとえば、高木仁三郎の「市民の科学」

『市民の科学をめざして』1999年、朝日新聞社。

『市民科学者として生きる』1999年、岩波新書。

（4）課題あるいは展望

14. 個別的なテクノロジーの問題にとどまらず、文明の問題として、キリスト教から文明総体をどう見るかということ。核を組み入れた文明の選択は可能か、そのための文明の条件は、また人間の条件は？

・創造された共同創造者(Human Being as the created Co-creator)

・両義性を前提にした文明という現実

15. 超合理的形成という源泉から生み出された豊かな形態化（合理的）の可能性：

神律的文明（第一段階を前提とした第二段階）

神的目的に規定された手段の方向付け

16. 現代の課題：キリスト教／世俗的合理性／宗教的多元性

<関連文献>

1. 矢内原忠雄(1893-1961)

『現代社会とキリスト教』（キリスト者の信仰IV）岩波書店、1982年。

2. ティリッヒ (1886-1965)

・J. Mark Thomas (ed.), *Paul Tillich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer, 1988.

・ジェラルド・C・ブラウアー編『宗教の未来』聖学院大学出版会、1999年（1966）

「宇宙体験が人間の条件と態様に対して与えた影響」（1964?）

「進歩の理念の衰退と妥当性」（1964）

・ロナルド・ストーン編『パウル・ティリッヒ 平和の神学 1938-1965』新教出版社、2003年（1990）

「水素爆弾」（1954）、「ベルリンの状況における倫理的問題」（1961）

3. 芦名定道

・「P. ティリッヒと科学論の問題」『キリスト教文化研究所紀要』（東北学院大学キリスト教文化研究所）第20号、2002年8月、pp.1-31。

・「科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より」『宗教研究』（日本宗教学会）第87巻、377-2、2013年、pp.31-53。

・「現代キリスト教思想における自然神学の意義」『哲学研究』（京都哲学会）第596号、2013年10月、pp.1-23。

4. 島菌進

「現代日本の宗教と公共性——国家神道復興と宗教教団の公共空間への参与」（島菌進／磯前順一編『宗教と公共空間——見直される宗教の役割』東京大学出版会、2014年、261-284頁）

5. 池内了

『科学の限界』ちくま新書、2012年。

6. リクール『イデオロギーとユートピア——社会的構想力をめぐる講義』新曜社。

1976年シカゴ大学。1986年出版。